

# Dhādekī-Sālhāpūr の家庭生活と周辺小都市

—北インド農村の社会と生活 (Ⅲ)—

佐々木 明

この稿では前稿を発展させ、従来のインド農村社会の人類学的研究ではどちらかというところ軽視されがちであった家庭生活と村内外（特に小都市）との関係をのべる。前半では調査例を中心に記述し、後半では関連分野の研究成果を導入し近世北インドの農村都市複合を概述し、特に Hinduism についても言及する。

## (I)

村外生産品を売る店 (dukān (P)) が Dhādekī には6つあるが、商店らしい設備のあるのは1 Jāt の店のみである。他の5名 (Khatti, Dōm, Brahmin 各1名, Harijan 2名) は居室の一隅に町で買った多少の品物を並べただけで、子供・主婦が店番をして長い失業期の収入の一助とする (Saith & Thana, 1972 : p. 717) 程度のものである。この他に県庁所在地から布を仕入れ、村の Harijan に売る Harijan が一名いる。Jāt の店は以前 Khatti (木工 caste) の一人と共同営業していたが、1950年代の半ばに Jāt の地主から資金 (150 Rs) をかりて、現在の店を購入し、以来単独営業となった。店主は盲目の Jāt で、客は Hindū, Musalmān を問わないが、男性または幼女のみである。一日の客は10~20人、日商は調査当時 40—50Rs で、店主の手許に残るのは一日あたり 5—10Rs だった。扱っている品物は、食料品・調味料・雑貨類<sup>1)</sup>である。

村民が行う商業的活動としてディーゼル発動機を用いた製粉所がある。1960年代までは村内に製粉施設がなく、隣村まで運ぶ必要があったが、1970年代前半に三人の Jāt が施設をつくった。ただし、一つは調査当時長く故障しており、一つは信用がないので、村民が実際に使っていたのは一つだけである。信用のない製粉所をつかうのは主として隣村の被差別 caste である<sup>2)</sup>。被差別 caste の穀物が製粉過程で自分の穀物に混入するのが、被差別 caste から穀物をうける、つまり現物賃金をもらう農業労働者である、ことを意味するように Jāt には感じられ、身分を下げる行為であるとみなされるので、被差別民と同じ製粉所を用いるのを Jāt が忌避する結果になる。

村内での商業の未発達を補うのが、様々な行商人である。毎日 Dhādekī にくるのは洋服屋と八百屋である。洋服屋 (Darzī (P)) は近くの町のイスラムで、手廻しミシンをあずけてある Jāt の baitakk (前稿 p. 52 参照) の前面の baramdā に60年来毎日歩いてきて、すでに2代目である。支払いは現物 (穀物) または現金で量は特にきまっていない。場所を提供する Jāt に特に金品を渡すことはない。この村が比較的大きく、一定の需要のあることが Darzī 営業の経済的条件であるが、Darzī が町で営業せず、村にでむいて開業しているのは経済的条件のみからは説明できない。一般的には行商 (というよりは町から大きめの村への「通

い」営業)が成立するのは、pardah によるところが大きい。Pardah によって女性が ghar を出る機会さえ制限されていたから、町の店に女性がいくのは事実上不可能だった。村の中で Darzī に仕事をさせれば、Darzī との直接交渉は pardah によってできぬものの、Darzī との間に子供を何回か歩かせれば試着・注文できるから、通いの Darzī は注文服を村の女性が入手する最善の方法だった。

八百屋も pardah 規制により村に「引きつけられる」職業である。買いに出るのは主として子供だが、近くの家の女性がこっそり買いにくることもある。八百屋は毎朝村長の ghar の前に町からやってくる。町には野菜<sup>3)</sup>の朝市が立ち、八百屋はそれを買ってくる。野菜を町に売りに来るのは、近郊の野菜作り農民 caste (Mali) である。Jāt は伝統的に野菜造りを忌避するので、自村内で野菜をつくる場合には中間 caste の適当な者を雇って耕作させる。自村内で生産する場合でも、野菜畑に入ることを Jāt が忌避するために、中間 caste が収穫したものを Jāt がうけとり、他に転売するか、また中間 caste から直接購入するシステムをとらざるをえない。前のシステムは Jāt が耕作忌避をするのと同じ理由(野菜畑が不潔な施肥を必要とし不潔である)から、Jāt がやはり忌避する。かといって後者は、Jāt にとり身分を下げる行為である(現物賃金を中間 caste から支払われるのと同様と考えている)。それゆえ収穫物を一度町で売り渡し、その代金を地主が入手する。場合によっては売り渡した野菜がまた村にもどってくることもあり、また他の村でも自村同様の「不潔」な方法で野菜をつくるのだから、こうして一度町へ出て、行商人が再度農村部へ持ち込む野菜を購入するのは、野菜耕作忌避と矛盾するかに感じられる。しかし、ともかく村内での身分を下げる現物授受をさせて、租税徴収類似の代金收取にかえる。

この他に Sikh の靴なおしが月に2・3回町からきてサンダルをなおす。印パ分離時の旧難民で、自転車を通い、子供相手のおもちゃももってくる。以上三種の通い営業を記述したが、今世紀に入るまでは衣服は簡単であり、野菜を食べるのも一般的ではなく、裸足が普通だったから、現在のような通い営業は不可能だったとみられる。Pardah 規制はあったから、この種の小売業が行商によるのは避けられぬが、訪問の頻度が現在と比較にならないほど低かったのは確実である。非主穀商品作物(ここではサトウキビ)の栽培拡大により、Jāt の購売力が増大し、衣類・副食物の購入量が増加し、通い営業が定着したとするのが正確だろう。通い営業から購入するのは主として Jāt である。被差別 caste には購買力がなく、営業場所に彼等が入りにくいことに加えて、購入するところを雇用者側の Jāt にみられると、「ぜいたくをするのは賃金をやりすぎているからだ」として、賃金カットの理由にされかねぬから、Jāt に知れぬように購入するのを好む。

町からの「通い」営業の成立は近代的であるが、村落間を移動する非商業的の営業には伝統的なものが多い<sup>4)</sup>。Caste 職業に従事する村外者で最も頻繁にみかけたのは隣村の床屋(Nāi)である。Dhādekī にも Nāi の caste に属する居住者がいるが、隣村の Nāi の1人で近くの町に店をもつものが、午後になるといくつかの村をまわって、整髪・ひげおよびわきげりを行い、週に2・3回 Dhādekī にもくる<sup>5)</sup>。隣村の羊飼は、村の中でなく村周辺の村の下草を食べさせて歩くので目に触れにくいのが、実際にはかなり頻繁に出没する。午前中は隣村の madrasa で子供達に Urdū の読み書きを教えるイスラムの老人が、午後になると孫とともに雄山羊(時価200Rs)・雌山羊(250Rs)併せて11頭をつれ、60—90km<sup>2</sup>を一週間かけてま

わる。村の周辺は主として果樹林でその下草を飼料とするが、果樹所有者に料金を払わない。家畜の売却先は町の市場で、町の人口の過半をしめるイスラムが主たる消費人口である。芸能的機能をもつ移動者に Barūpī と乞食がある。Barūpī は町からくる一種の「漫才 caste」で、一人一人に排他的な縄張りがある。彼等の仕事は、たとえば警察官の服装をして、自分の檀那の Jāṭ の所に行き、家族の誰かを逮捕する真似をし、上手くかついだ所で、「実は自分は Barūpī だ」といって演技料をもらう。失敗し露見しても多少の金銭穀物をもらう。乞食はタンブリン (dalli, khajri) をうち、歌いながら目ぼしい家の軒下で布施をもらう。支払い量は Barūpī 同様不定である。

大地域を移動するものに、放浪的鍛冶屋集団である Bāgli がある。家族ともども家財道具を車につけ北インドの農村・都市を移動巡回する Bāgli は、伝説的には Rajasthan の Chitor の Rajput 王国の崩壊以降、祖国再建を期して、諸地を流浪する人々である。Kharif (夏作) 収穫のあとをおい、Uttar Pradesh 州を東から西に移動し、Dhādekī を含む北インド中央部に達するのは、ほぼ Diwali の前後である。地面に穴をほってすえたふいごを女が操作し、男が鍛冶をする。Chimtā (ピンセット) から kulaharā (大斧) までなんでもなおす<sup>6)</sup>。鉄製農具・器具の修理で特に急がないものは、毎年ほぼきまった時期に来る Bāgli の来訪まで待つ。つまり、必ずしも鍛冶屋 caste が村にいる必要はない<sup>7)</sup>。

北インド全般で行商人、および類似の非商業的移動者の多かったことが知られている。たとえば Punjab では商業的・非商業的機能 (手品師・猿使いを含む) 機能をもつ13種類の移動者を報告している (Eglar, 1960 : p. 63)。商業的移動者の商品も多種におよび、軽量で比較的利益の多い布・染料・香料、自ら移動する家畜なども含む (Opler, 1956 : p. 10)。小都市での買い物の往復に半日かからない Dhādekī では、行商人の役割がやや低いが、それでもこうした移動者が観察される<sup>8)</sup>。行商人等の発達は、「自給的」な農村で分化した職業 caste が手工業生産品・第三次産業の需要を満たしていたとする jaimānī 的インド農村像とは、大きく矛盾する。また現実に観察できる「通い」営業が近代的であることは一見 jaimānī 社会が確立した所に近代都市機能が侵入したかにみえる。

しかし、一般的に近代都市の商業的機能が拡大すると行商人の活動が縮少すること、さらに家計を実質的に運用する主婦が pardah 規制により自由な買い物をできないことを考慮すると、前近代状態では行商人等による諸需要充足が現代より大きかったことを認めざるをえない。現在の「通い」形態が近代的であるのは事実だが、来訪頻度の低い多数の行商人等による伝統的な形態から、観察された状態へと変化したとみるべきである。Jaimānī 自給農村像は近世都市手工業生産が農村需要を対象としなかったとする経済史的定説と補完的であるが、農村で生産される大量の物資を納税等で集中させ、この物資を消費して生産されるやはり大量の手工業生産品が、人口比率からみてかなり小さい近世都市で消費つくされたと考えるのは不自然である。経済的比重を論じないにせよ、jaimānī 的供給と行商人等による供給が並存しており、後者によって、納税等による物資の近世都市集中とは逆方向の財の還流が部分的に実現していたと考えるのがはるかに自然である。

近世中 Dhādekī と含む一円の農村地帯と一つの農村都市複合を形成していたとみられる附近の小都市<sup>9)</sup>と、現在の Dhādekī とを結ぶ最も重要な関係は、主力商品作物であるサトウキビの売却である。商品作物の売却は家庭生活と小都市の関係から少しづれるが、農村市関

係を考える上で不可欠の項目なので、ここで言及する。小都市への売却は、原サトウキビでなく中間加工品である粗糖で行われ、Dhādekī 粗糖の全量がこの町 (Mangalaur) に運ばれる。かつては隣県の県庁所在地に送ったこともあるが、現在では値段のよいこの町に運ぶ。粗糖取扱業者は 70 年代以降急速に増加し、調査当時 40 人以上に達した。業者の多くは kacchā arthī とよばれる仲買い人で、農民が町に運びこんだ粗糖を他州を含む広汎な地域からくる業者にみせ、せりの仲立ちをして取り引き額の 1/4 を手数料としてとる。残りの 1/4 が pakkā arthī とよばれる本格的業者で、粗糖を前者よりもよい値段で購入するから、農民は後者との取り引きを好む。粗糖生産期には周辺農村から大量の粗糖が町に流入し、大量の運搬労働力が必要となる。供給源は町の人口の約 3/4 をしめるイスラム教徒のうちの貧民児童で、1 日あたり粗糖塊 1 ケの超低賃金で雇入する。

農業経営者である Jāt が粗糖の値動きをみながら町に運ぶ積極的売却である粗糖売却に対して、町の商店主に雇入された非経営者住民が牛乳を毎日町まで運ぶ消極的で小規模な売却もある。朝と夕方に 4 台程の自転車がブリキ製の牛乳容器を二つづつつけて町に行く。牛乳の町・村内での価格比が 10 以上になるので、町に売るのが極めて有利である。印パ分離当時の旧難民である町の業者が、Dhādekī の下層 caste<sup>10)</sup> に自転車を貸与し、わずかな賃金を間接的に支払う。村にいる手代 (naukri) に業者が相当額を払い、集配人・牛所有者に分配する。搬出する牛乳は 1 日に約 90kg で、この量を得るには 5 頭前後の雌水牛で充分だから、牛乳販売は零細な経済活動である。主力農産物の売却だけでなく、都市での手工業品原産料・最終消費物資供給を目的とする小規模な売却組織があることの例示として、牛乳販売について述べた<sup>11)</sup>。

粗糖売却・牛乳販売ともに近代的起源をもつのは明白だが、近代以前にも周辺農村から小都市への余剰生産物 (特に主食用穀物) 売却が行なわれていたのも明白である。近代以前から成立していた北インドの小都市が、内部で若干の農業生産を行っていたのは事実だが、主食用穀物を含めた当時としては大量の食糧需要と西アジアも含めた商業圏に輸出された手工業品の原材料需要とを都市内部で満たしえたとは考えられないから、特に歴史文書によらなくても、農産物の前近代的都市への集中は明白である。Dhādekī の個々の世帯が小都市とむすんでいた近世的経済関係は、基本的に現在と大きくかわらなかつたとみて大きな誤りはないだろう。

この観点から復元される伝統的構造は、農業経営者 caste である Jāt 男性が主力生産物である小麦を、Jāt も含めた村民男性の一定部分が小都市業者の組織にくみこまれて棉花もふくむその他の農産物・中間加工品を、それぞれ小都市市場に売却し、近世小都市の手工業生産品である日用品・雑貨 (特に衣料)、多くは移入品である一部の食料・調味料等を、主として行商人を通じて女性が ghar で購入する、二つの大きな流れからなる経済関係である。村外で生産される消費物資の購入決定は、pardah により ghar から離れるのを強く制限されていた女性の判断を必要とするから、小都市市場を経由するこれらの商品を ghar のなるべく近くにもっていく必要、つまり pardah があるかぎり行商人の必要があった。農村から小都市への主穀中心の大量の農産物の男性による直接売却と、行商人を仲介させた小都市から農村への手工業産品等の売却で、部分的にバランスをとる近世的関係が、現在観察される都市都市社会の原形だったと結論できる。

現在の非商業的農村都市関係は著しく近代的で、前近代的先行形態を想定しにくい。医療はその典型である。何等かの加療者が北インド農村にも必要で、専業医者 caste がないので、“Ayurvedic”の薬を与える Brahmin が加療者であったと漠然と考えられている。Dhādekī でも19C末に1 Brahmin が民間療法を行ったが、特に Ayurvedic だったのではなかった。この Brahmin の子孫が近くの Hindū 聖地の Ayurvedic の学校を卒業し、40年代に昼間は小都市で、朝夕は村で営業したのが Ayurvedic と Dhādekī の確かな関連の遡及上限である。Dhādekī では、独立前から遠くない町の陸軍病院・小医院を利用できたので、遅効的な Ayurvedic は人気がなかった。北インド農村の Brahmin が英領期以前から Ayurvedic を知っていたとの報告例はないから、Ayurvedic は北インド農村に関する限り、逆説的だが近代的医療とともに1930年代に普及しはじめた近代的文化要素とみるべきである<sup>12)</sup>。独立後没落した Sunār (金鋸細工 caste) と Tyagi Brahmin の2人が隣村で医師を開業し、Dhādekī でも利用するようになった。

学校制度は現代の商業的農村都市関係で最も目立つ存在である。幼稚園とよぶのが年齢的にはふさわしい<sup>13)</sup>小学校のみが Dhādekī の村内にある。小学校が1961年にできるまでの隣村に通学した。いまでもイスラム教徒には小都市の madrasa に通うものがある。主として経済的に余裕のある家庭の子弟である「年長組」は書板をもって8時まで学校へ行き、一列にすわって順番に学習する。二人の先生が前にこしかけ、口頭で出す字・単語、簡単な作文・計算の問題をとく。「年少組」は主として被差別 caste で、貧困のため書板をもてず、先生が黒板に書く字を習う。小学校は無料だが、文房具を買えぬ家庭の割合いが高い。下層では年少組の間はなんとか学校に出せるが、年長組の年齢に達すると多少の賃金を稼がせる必要が生じる。非差別 caste にとって子供達を年少組の被差別民と一緒に学ばせるのは好ましくないから、入学前に字を教え、始めから年長組に入れ、一年で修了させて、小都市の高等小学校に進学させる。

小学校への全 caste の出席率平均が50%を越えるとは考えがたい<sup>14)</sup>。確実な統計はないが全人口の1/3の Jāt がほぼ毎日出席し、同1/3の中間 caste がこれに準ずるとして試算すると、被差別 caste 子弟の出席率が10%以下であるのは違いない。この率を考えれば、中学教育を受ける水準に到達できるのが地主自作農 caste に実質的に限定される現状 (Joshi & Rao, 1964 : p. 269) は当然である。名前がかかる程度の水準を目標とするにすぎない (Eames, 1965 : p. 179) 無料小学校教育でも被差別 caste の前近代的状態に比せば大きな前進であるが、現実にはこの程度の識字率でさえ土地所有規模と密接な関連があり (Joshi & Rao, 1964 : p. 22), caste 撰別的傾向は単純な観察によるより強いようである。ほとんどの被差別 caste 子弟が初等教育で排除され、中間 caste 子弟も同様に中等教育で排除され、高等教育をうけようのは実質的に地主自作農の富裕な部分に限られるから、教育を通じて北インド農村の身分構造はむしろ強化される。

高等教育と考えられているほぼ日本の現行高校教育以上の水準の教育をうけた Dhādekī の子弟は、独立前には Jāt Brahmin 各一名だったが、独立後教育の機会が増大し、Jāt を中心に大量の B. A. 取得者 (高校卒業と同年齢) が出ている。M. A. (短大卒業と同年齢) は少なく、独立前は Jāt 一名のみだった<sup>15)</sup>。被差別 caste にも高等教育を受ける機会が全くないわけではない。現に同じ県の少し離れた小都市の大学に通学する Chamār の子弟がいる。しかし高等教育をうけると職を得るために離村し、村で受ける差別を避け一生村外にと

どまり、村の不動産のある Jāt のように退職後帰村することはないから、その代かぎりで村との関係が途絶する。中間 caste でも事情はほぼ同様で、瀬度はやや高いものの、他の報告 (Singh, H, 1969 : p. 759) にもあるとおり都市的雇用・教職につくのが目的で、離村するから、被差別 caste ほど急速にはないにせよ、村との関係はやがて途絶する。

今世紀に入って植民統治上現地人官吏養成の必要性から高等教育機関が整備されるまで、小都市の madarsa (イスラム学校) 以外に教育機関がなかったのが北インド諸地域の実情だった。現在でもイスラムの一部がこの経路を通じて子弟を教育し、教育された子弟は現在の中間諸 caste と同様に次第に村との関係を薄くしていったとみられる。Madarsa が唯一の教育機関だった時代には、少なからぬ Hindū がそこで教育を受け、一部は改宗イスラム教徒となって近世都市の中間層に人口を供給していた、としないと、伝染病流行時に人口減少をみやすい人口密集地である近世都市の人口規模が維持されたとみられることを説明できない。地主自作農 caste が madarsa で教育を受け、不確実・不安定な近世都市中間層に進出する事態は、地主自作農の経営体教が増えるの比し耕地が増大しない危機的段階まで到達しないと一般的にならないとみられる<sup>16)</sup>から、教育を通じた前近代的農村都市関係は農村から都市への小規模な人口移動を生ぜしめる性格をもち、伝統的農村社会そのものにとっては余り重要でなかったと結論できる。

## (II)

以上では Jāt を中心に Dhādekī の家庭生活と小都市の関係から、近世北インドには発達した農村都市複合が存在しており、現在観察できるこの種の複合が英領化以降の様々な近代化により変化してはいるが、基本的には近世的複合を基盤としていることを指摘した。以下では社会経済史学等の研究成果を導入して、近世的農村都市複合をより明瞭に復原し、静的社会構成・経済的自己完結性を特徴とするとみられがちであった北インド農村社会が、他のアジア諸地域の農村社会と同様に変化にとみ、都市社会・近世政体と密接な関連を有したことを述べる<sup>17)</sup>。

最初に述べるべきなのは、Jāt を含む北インド農村の支配 caste の祖先であった手作地主層が、近世的文化の枠組みのなかではあるが、経済的变化に柔軟に対処しつつ最大利益を上げようとした非自給的農業経営者 (McAlpin, 1974 : p. 683) だったことである。Hinduism の歴史観から描かれる、一方的租税徴収の被害者・Mughal 支配のゆるみを狙って Hindū 支配を復興させるべく農村に逼塞している伝統的旧支配層等のイメージは事実から極めて遠い。北インド農村経済の自給性はどんなに遅くとも 17c 中には消滅し、手作地主層は ghar に穀物室を設け、高価格時の売却を計る一方、貯蔵主穀 (小麦) の一定部分を自家消費・雇入農業労働者現物賃金用等に確保し、大面積ではないが非主穀商品作物栽培を行った (ibid., : p. 677)。つまり、近世北インドの手作地主層は近世的商品作物 (量的には主として小麦) を地域市場 (主として小都市の固定市場) に売却する農村居住者であり (Cohn, 1968 : p. 41, <sup>18)</sup>), 非自給的経済関係が近世的農村都市複合の基調となっていた。手作地主 caste 以外には主穀余剰等の農産物を売却できる農村内身分はなかった。

農産物の売却による貨幣収入の一部は都市での手工業製品購入にあてられ、一部は農村内での様々な支払い (行商人等への支払いを含む) にあてられたとみられるが、これらの項目

を全部加えても、売却代金の一部にしか充当しないのは明白である。つまり近世北インドの小都市市場が大量に吸収した (Habib, 1969 : p. 77) 余剰を売却して農村に流入するはずの大量の通貨の大部分が、農村を経由せずに、直接小都市に還流するシステムが存在していたとみられる。売却代金が農村に流入すれば農村購買力は極めて大きく、近世都市の手工業製品の主要市場を農村に求めるべきだが、前述した行商人を通じての間接的購入を考慮しても、近世的手工業の主要消費市場が近世農村ではないのは明白だから、売却代金が農村をバイパスしたシステムを考えざるをえない。小都市市場への農産物売却は手作地主の各世帯の成人男性が行い、各自が市場で得た貨幣の大部分を代表者があつめ——つまり農村では消費せず——, mauza(村)にかかった租税として、やはり小都市にすむ近世の上級所有者(またはその代理人)に納入した、と考えるのが現段階では最も正確とみられる。

小都市市場での換金の主対象だった主穀は同時に都市生産品購入用の現物通貨だった (Whitecombe, 1971 : p. 181) から、村内外での都市手工業品購入に貨幣は不必要であった。Dhādekī での観察からも明らかなように、村内での労賃支払いも原則として現物だから、貨幣が農村をバイパスして、小都市市場から封建的支配者へ移動し、ほぼ都市社会内部で動いても農村社会に流通問題は生じない。14 c に開始した Delhi 中心の貨幣による徴税システムは中世中に北インド全域に拡げ (Habib, 1969 : p. 39), 余剰農産物(主穀)換金が近世手作地主の主要義務と感じられる基盤は Mughal 期以前から整っていた。納税目的の換金市場が各小都市に成立し、この末端を通じ主として小麦からなる大量の農産物が都市社会に流入し (ibid : p. 41), 小麦以外の作物の都市別専門化が生じるまでに地域経済は発達した (Neal, et al., 1965 : p. 166)。

Mughal 支配が定着させた近世の市場経済を背景に北インドの手作地主は基本的義務である主穀換金を安定的有利に行う (Habib, 1969 : p. 44) システムとしての農村身分組織を固定させた。上層 caste のみが都市社会と継続的に接触し、非手作地主 caste が都市経済と接触して蓄財し上層 caste の諸権利を侵害する事態を予め回避し、上級所有者に対しての納税量確保と自己の経営安定を計るために、非手作地主 caste 不在土地保有を認めず、一旦農村を出たら戻れない慣行は、この身分組織固定の過程で生じたとみられる。継続的に接触する手作地主・都市商人関係を媒介にして、近世都市の支配的文化が変形しつつ農村に拡散した<sup>19)</sup>。近世の支配的都市文化はインド・イスラム文化だったから、農村文化もその色彩が強かった。19 c 中葉の近世市場経済の崩壊につづき、19 c 後半に近世インド・イスラム文化の再生産が停止し、20 c 初めに近代 Hinduism が流入することにより (Cohn, 1959 : p. 166), 北インド農村文化は大きく変化する。

以上から、伝統的北インド農村をより完全に理解する条件の一つが、小都市を単位とする地域経済の理解であることが判明する。小都市に農産物を売却する一円農村の分布は半径 8—10km 以内だった (Neal et al., 1965 : p. 1622, Whitecombe, 1971 : p. 181)。この距離は農産物を大量にのせゆくり移動する往路、換金した貨幣を胸中にした復路の双方が、盗難の懼れの多い夜間・正午前後の酷暑<sup>20)</sup>をさける最大距離である。北インドでは大河川氾濫原を除くと運輸条件に差がなく、耕地・集落も比較的均質に分布するから、小都市の分布状態も一定している。運輸上の障害は雨期の滞水で、多少の地域差はあるが、雨期になると市場への搬入量が減少し、収穫期前後の入荷量の激動以外の季節性を生じている。

近現代北インドでは小麦の他に加工用商品作物（サトウキビ・ラッカセイ等）が多く売買されるが、近世後期までは非主穀作物の重要性が小さく小麦が主体であったことを、非主穀商品作物を加工する手工業の処理能力、手工業製品の市場規模、都市人口に占める手工業従事者割合と非手工業従事者の消費すべき主食品作物の大量性、の三点から容易に結論できる<sup>21)</sup>。伝統的な主力商品作物だった小麦の出荷量の季節的変動は他の作物と異なっており、その重要性を物語る。小麦以外の作物の季節的価格変動が激しいのに比し、収穫直前の2月前後の短い昂騰期を除くと小麦価格の安定度が顕著に高い (Neal et al., 1965 : p. 146-150)。この特異性は、かつての手作地主の子孫である現代北インド農村の地主自作農支配 caste が、小麦出荷の調整により利益を極大化する技術を長期間にわたる経験で獲得しているのに比し、他の近代的非主穀商品作物では出荷調整が不完全であることに原因しているとみられる。

近世的都市の後述する特質から明らかのように最終的にはイスラム商人 (ibid : p. 133) が集荷する小麦のかなりの部分は、農村の手作地主が搬入した小都市で直接消費された。残りは14cに遡る (Habib, 1969 : p. 71) 畜力輸送集団 (banjara 等) によって需要の多い大都市等に運ばれた。北インドの無数の小都市市場から出荷された小麦が Bulandshahr 県の An-upsahr, Farrukhbād 県に出荷され、舟運で Illahabād, Awadh, Bihar, Bengal Subah に運ばれ (Siddiqi, 1969 : p. 174), 北インド西部の諸都市に集荷された小麦を何回も中継して Ajmer, Multan, Sind Subah に陸送したことは、近世市場の規模と充実を示す。英領期に入ると徴税目的の近世市場は消失するが、商品作物の総体は植民地経済に特有の加工原料増加によって増大したから、支配 caste が搬入する総量はむしろ増加した。20c初頭でも小麦価格は他に比して高水準だった (Etienne, 1968 : p. 55) から、北インドでは一貫して小麦が中心的商品作物の地位を保ったと考えて大過ないだろう。18c末までつづいた近世小都市社会と市場経済は19c後半を中心に、現代と連続的な体制へと移行し<sup>22)</sup>、農村都市複合も対応して現代のそれに変化したとみられる。

19cの都市社会・経済的変動と同時的な都市文化の変化を考えるのは、都市文化に決定的に影響される農村文化を考える上で不可欠である。現代北インド都市の Muslim は主として未熟練労働者・日傭であり、経済状態が不可触賤民と大差ない (Gupta, K. A., 1971 : p. 1882) とまで表現され、郊外村の Muslim 農民の多くは Hindū の忌避する野菜造り農民だ (Mukherjee, A. B., 1967 : p. 121) から、近世文化での Muslim の支配性を考えるのは困難である。しかし、1911のNWP (現 Uttar Pradesh 州) の主要24都市の職業構成 (Brass, 1970 : p. 178) にみるとおり、Mughal 崩壊後半世紀以上だった20c初頭でも近世的支配性が残存していた。都市人口の約6割が Hindū だが、Muslim がどの職業にも比較的均等に分布し都市居住歴の長いことを推察せしめるのに比し、Hindū は特定の 'Hindū' 商業 (金融業、仲買・倉庫業、豆穀物商) と農業で顕著に多く、二つの職業につく Hindū のみが伝統的都市居住者ではないかと考えられる。Muslim では文化人等が顕著に高く<sup>23)</sup>、さらに注目すべきは農業全体では Hindū が多数だが、不在地主・農園管理人では Muslim がやや多く、小作農以下では反対に圧倒的に Hindū が多い。全体として農園所有者・管理者、伝統的知識階級としての近世都市上層 Muslim の支配性の痕跡がこの時点でも明瞭に看取されたことを強調してよい。



20 c 後半には近世支配の痕跡は消失し、Muslim の多くは工業（主として工場労働者）に従事し、農業が少ない近世の非耕作者的性格のみが残存する（Chauhan, D. S., 1960 : p. 1149）。この時点までに、Hindū が経済・政治を握る中・上層、旧都市 Muslim が下層労働者に集まる近現代北インドの宗教的階級構造が定着した。印バ分離時まで北インド都市の行政機構が人口的には旧都市 Muslim に支持されながら、植民地政府が Muslim を徐々に Hindū に置換して、19 c 中葉に消滅したはずの近世的支配を利用し、かつ払拭しようとした（Brass, 1970 : p. 173）のは既に指摘されている。都市 Muslim の優勢は時代が古くなるにつれて顕著で、19 c 中葉以前の北インド都市を支配し、ある種の商業<sup>24</sup>)を除くと中上層を Muslim が独占する状態だったのは確実である。

近世北インド都市の Muslim 支配は当然文化的側面にも及んでいた。現代都市では Muslim 人口率と識字率とが負の相関を示す（Shyam and Krishan, 1974 : p. 800）から、Muslim の文化的優越を想定しにくい。しかし近代都市に比せば近世都市で文盲率が高いのは当然であり、現代北インドでも Muslim の多い、つまり近代以前から存在した近代化のすすまないより伝統的な都市で文盲率が高いのは当然である。近世都市社会内では大量の文盲 Muslim のなかの少数の識字中・上層が知的独占をしていたことも説明を要しない。それゆえ近世都市文化の基本的性格を考える上で問題になるのはその少数の文化の帰属である<sup>25</sup>)。前述のように20 c 初めの文化人が主として Muslim であり、1870年以降の定期刊行物の言語別分類で Urdū が Hindī の約3倍だった<sup>26</sup>)のは、この少数文化が Muslim によっていたことのあらわれである。近代化過程では旧少数文化主導層が積極的に導入した英語教育（Gopal, S., 1967 : p. 83）を、やはり旧少数文化の媒体だった Urdū 教育を中間媒体として、非 Muslim が旧主導層を追う型で受容することが知られている（Brass, 1970 : 172, 175, 181<sup>27</sup>)）。

北インドの伝統的農村が、Muslim の支配下にある都市の支配的影響をうけた「近世農村」（Cohn, 1971 : p. 69）であり、小都市を中心とする農村都市複合の一構成要素だったことが以上ではほぼ明らかになった。小都市周辺の多数の農村の社会経済的中心である多数の手作地主が納税を目的として余剰農産物を小都市市場で換金し、主穀を中心とする余剰農産物が大量に都市に流入する一方、手作地主の取得した貨幣が都市外に流出せず直ちに小都市内部に還流する経済的集中機構をにぎる都市上層住民が多くの場合間接的に農村を支配するのがこの農村都市複合の基本構造である。

Hinduism では北インド Islam 支配が Hindū 農村に実質的影響を与えなかったとみなして、一方では Islam 支配の存在を認めながら古代インドと近世農村との間の連続性を強調する。たとえば税制・土地制度用語は Arabic だが、この用語体系は非 Perso-Arabic な古代インドと関係のある先行的中世用語体系を駆逐・交替させて普及したと早くから考えられてきた（Baden-Powell, 1972 : p. 15）。しかし現在に至る約一世紀の研究史は古代インドと関係のある先行体系を報告していない。Mughal 支配確立に伴う用語体系整備がそれ以前の用語を完全に払拭したとは考えられないから、古代インドと関係のある先行体系を示唆する用語の欠如は、整備対象たる先行体系も Perso-Arabic だったことを意味すると考えざるをえない。つまり近世北インド農村社会の枠組を決定した法的概念・諸制度は古代インドとは無関係な中世北インド慣習法を整理・成文化した、つまり Islam 法だった（Cohn, 1959 : p. 83）とみるべきである。近世支配がもともと異質な中世農村を暴力的に支配し、近世農村へと強制的に変化させた、または暴力的支配を試みたが変化させられなかった、のではなく、

中世農村の諸側面を基本的には同質の近世支配が選択的に発展させることにより近世農村へと次第に変化した、と考えるのが最も自然である。

近世北インド都市社会での Muslim 文化の支配性を強調すると、これに対して農村社会に Hindū 文化が存在したかの錯覚をもちがちである。しかし近世北インド農村文化が、支配的 Islam 文化の deform した模倣ともいべき基本的性格を有していたのは明らかであって、18c. Islam の Wali-Ullah 運動のような革新的哲学を近世 Hindū ——北インドの被支配民——に求めるのが困難である (Srivastava, 1969 : p. 25) のは当然である。文化活動を行うる前述特定商種の都市上層に属する少数 Hindū のうちの一部を中心として、近世中にも知的活動としての Hindū 哲学が北インドに限定的に存在したのは否定できないが、Islam 哲学の影響に比較すれば、無視しうる程度の影響しか農村文化に与えなかった、と考えるのが現段階では妥当である<sup>28)</sup>。

## 註

- 1) 小麦粉・米・ビスケット・豆・バター、塩・砂糖・紅土等調味用顔料・マンゴ干果粉末・サゴヤン粉その他の調味料・pānの原料、紅茶、石鹼・ノート・鉛筆・電池。
- 2) 被差別農業労働者 caste は、現物賃金として農業経営者 caste から受けとる小麦を製粉する必要がある。農業経営を行わない中間 caste でも現物賃金が入れば製粉する必要がある。その場合 Jāt と同じ施設を用いることに Jāt・中間 caste 双方は抵抗を感じない。
- 3) gāgli (里芋：調査当時 0.25R/kg), allū (ジャガ芋：同), milchi (トーガラシ：0.3R/kg), kuḍḍū (カボチャ 1 R/kg), gēhū (小麦粉 2 Rs/kg)が多い。支払は現金・現物。
- 4) Dhādeki の規模が大きく中間 caste 数が多いために、他村からの caste 職業従事者の入村は少ない。小村では caste 職業の需要をみたすに充分な数の職業 caste がないことが多く、以下にのべる村落間特有の caste 職業的営業による必要性が Dhādeki よりも大きい。なお村落内の caste 職業にもとづく諸関係については後稿であつかう予定。
- 5) Dhādeki は大きな村だが、この程度の Nāi の仕事で村内需要の一定部分を満たせる。逆にいえば Dhādeki のように数世帯もの Nāi が居住する必要は caste 職業の需要からみれば存在しない。数世帯あれば caste 職業については失業せざるをえない。
- 6) ただし森林伐採用の大鋸は修理できない。この道具が近代的なものであること(さらに森林伐採・開墾の急速な展開も近代的であること)を暗示している。
- 7) 急いで修理すべき最も重要な道具は小麦収穫の際の鎌の刃こぼれだが、鍛冶屋の施設は不要で、khatti (木工 caste) が代行できる。
- 8) 後述するように近世北インド小都市は農村地帯の 8—10 km 毎に成立していたから、Dhādeki と町の距離が例外的に短いのではない。つまり、近世北インド農村の多くが歩いて半日で往復できる町と密接な関係をむすんでいて、近世中は町から村へ主として行商人が都市手工業製品を運んだのに対し、サトウキビ栽培の拡大とともに近代都市が成立し、商業的機能が都市に集中した Dhādeki を含む地帯では、行商人の機能が低下したとみるべきである。
- 9) Mughal 時代の最少行政区画である pargana の中心地でもあった。なお、「村」に相当する mauza は、行政区画であるより、むしろ知行区画であるとみるべきである。
- 10) 運んでいるのは被差別 caste だが、牛乳の特別な儀礼的資質(浄化力)が、被差別 caste の牛乳運搬を許しているとの意識は村民には全くない。仮にそのような意識があっても、他の caste ではなく被差別 caste が運んでいることを説明できない。被差別 caste が良好とはいいいがたい道路を苦心し

- て重い容器をつけて走るのは、日中の農業労働等の従業時間をへらさずに、たとえわずかでも定収入がえられるので、たえず窮乏状態におかれる彼等にとって、非常に有利な選択だからである。換言すれば、他の caste にとってはこの作業は有利でない。それゆえ、被差別 caste が従業する。
- 11) 近世北インドの主力農産品は後述するように小麦だったが、その他にも各種の農産物を近世都市に売却していたのは確実である。そのうち最も重要なのは綿花である。北インド農村に、農村内需給に比して著しく過剰の Julhai caste がいるのは、前近代的な綿花集中・半加工・搬出組織の残存のよう感じられる。その場合、Julhai caste は普通考えられている「機械カースト」ではないことになる。
- 12) Ayurvedic の擬古的近代化もふくめ医療近代化がおきるまでの農村居住者が利用できたのは主として Bhangī の呪術的加療(後述予定)で、都市のイスラム医学に基づく高級治療をうける可能性は支配 caste の富裕な部分を除いて、極めて困難だったとして大過ないだろう。
- 13) 調査当時の年齢と学校の対応関係は以下のとおり。(i) Primary School 1—5 学年(5—10才)、(ii) Middle School 6—8 学年(10—13才)、(iii) High School 9—10 学年(14—15才)、(iv) Intermediate School 11—12 学年(16—17才)、(v) Graduate & Other Professional Degree 13 学年—(17才—)。実際には飛び級等で攪乱し、(v)の修了年齢が18才のことも少なくない。
- 14) Eames, 1965 : p. 178 は出席率を50%としているが、多少過大評価ではないかと疑われる。
- 15) Jetley, 1969 : p. 726 では1025人中70人が Primary School 程度、37人が Middle School, 13人が High School, 14人が Intermediate School, B. A. が6人 M. A. が1人6人が代用教員資格取得、師範卒業が1人となっている。これに比べると Dhādeki の状況はかなり改善されている。
- 16) 一般に経営が小規模になると、生産性を合理的に向上させる必要がたかまるから、高等農業教育を受けた地主自作農子弟が帰村して直ちに農業経営するのが充分利益を生むと考えられるようになる。北インド農村でこの状態が出現するのは、教育設備が拡充する一方、投資量を増大させて土地生産性をあげ小経営を高収益化させる政策のとられる60年代以降である。
- 17) 拙稿 1980「固定的北インド農村像の近代的起源」(信州大学人文学部)『人文科学論集』No. 14 pp. 93—104 は、この部分と部分的に重複する。
- 18) この稿を含む一連の拙稿で「北インド」としている Mughal 期の Lohore, Delhi, Agra, Illah-abad Subah では、Mughal 支配の最末端機構のある小都市が主穀・非主穀商品作物の集荷市場になっていたとみてよい。より小さな小都市の、または非都市の定期市に商品作物の集荷機能がなかったとはいいたい、定期市が地域的に重要だったのは、上記 4 Subah の周辺地帯および上記 4 Subah に隣接する Multan, Ajmer, Malwa, Bihar, Awadh 諸 Subah であったと考えるべきだろう。
- 19) 後述するように、都市の穀物商人の多くが、利子取得を禁じたイスラム教との関連から、非 Muslim だったことが、近世中から手作地主層文化が非 Muslim 的だったことと無関係ではないだろう。
- 20) 牛車に大量の農産物をのせ移動すれば早朝から午前中にかけて 8—10km が限度である。また小麦収穫期及びその後は酷暑の時期でもあるので、正午前から 3 時頃までは動きがたく、その後復路につき日没前までに村に到着するにはやはり 8—10km が限度である。
- 21) 現在ではトウモロコシが主食用商品作物として重要だが、これが伝統的でないことは言を要しない。
- 22) 北インドと東インド間の運輸は 19c と始めに衰微し(Siddiqi, 1969 : p. 175)、東インド内の舟運も 19c 中葉までには消滅した(Klein, 1973 : p. 657)から、北インド周辺では 19c 前半、北インド内ではやや遅れて 19c 中葉に近世経済の崩壊、近現代型への移行が開始したとみるべきだろう。
- 23) この他、医者・教職・軍・警察・公務員に Muslim がやや多い。不在地主・農園所有(管理)者と同様に、英領支配が旧支配・行政関係者に必ずしも好意的でなかったにも係わらず、半数以上が Muslim だったことに注目すべきである。

- 24) Islam の教理により ribā (A) 利子取得が禁止されているのと、金融業等に非 Muslim が多い事実との関係は明白である。
- 25) 都市住民の大部分を占める文盲層、人口の大部分を占める農村居住者が、少数文化を文盲的に摸倣するのが前近代的文化の一般的なあり方である。
- 26) Brass, 1970 : p.179. Hindī が Urdū を追い越すのは1910年代である。
- 27) Urdū 使用の都市中上層が近世の政治的経済的組織に対応した近世北インド文化圏全体に広がっていたのは Cohn が指摘したとおりである (Cohn, 1967 : p.11)。
- 28) ただし、このことは近世北インドの都市・農村文化が Sunni 的だったのを意味しない。20c になって考えられるようになったのよりも農村文化が遙かに Islam 的だったことを意味するのであって、Sunni 的ではないのと同様に Hinduism とも無関係であることを意味する。

### Bibliography

- Baden-Powell, B. H. 1972 (originally 1896) *The Indian Village Community*
- Brass, Paul R. 1970 "Muslim Separatism in United Provinces" *Economic and Political Weekly* Vol.5 pp.167-186
- Chauhan, D. S. 1960 "Caste and Occupation in Agra City" *Economic Weekly* Vol. 12 pp. 1147-1149
- Cohn, Bernard S. 1959 "Some Notes on Law and Change in North India" *Economic Development and Cultural Change* 8(1) pp.79-93
- Cohn, Bernard S. 1968 "Notes on the History of the Study of Indian Society and Culture" in Singer, M. & B. S. Cohn ed. *Structure and Change in Indian Society* pp.3-28
- Cohn, Bernard S. 1971 *India: The Social Anthropology of Civilization* Engelwood cliff, Prentice-Hall
- Eames, Edwin 1965 "Population and Economic Structure of an Indian Rural Community" *Eastern Anthropologist* 8 pp.173-181
- Eglar, Zeklye 1960 *A Punjabi Village in Pakistan* Columbia University Press, New York and London
- Ettienne, Gilbert 1968 *Studies in Indian Agriculture: the Art of the Possible* (Tr. by M. Mothersole) University of California Press
- Gopal, Surendra 1967 "Social Changes in Bihar in the Second Half of the nineteenth Century" *Man in India* 47 pp.81-91
- Gupta, K. A. 1971 "General Elections of 1967 in a Small UP Town" *Economic and Political Weekly* 6 pp.1881-1886
- Habib, Irfan 1969 "Potentialities of Capitalistic Development in the Economy of Mughal India" *Journal of Economic History* 29 pp.32-78
- Joshi, P. C. and M. R. Rao 1964 "Social and Economic Factors in Literacy and Education in Rural India" *Economic Weekly* 16 pp.21-27
- McAlpin, M. B. 1974 "Railroads, Prices, and Peasant Rationality : India 1860-1900" *Journal of Economic History* 34 pp.662-684
- Mukherji, A. B. 1967 "Musalman House Type in Meerut Rural Area" *Folklore* (Calcutta) 8(4) pp.116-130
- Neale, Walter C., Harpal Singh and Jai Pal Singh 1965 "Kurali Market : a Report of the Eco-

- conomic Geography of Marketing in Northern Punjab" *Economic Development and Cultural Change* 13(2) pp.129-168
- Opler, Morris 1956 "The Extensions of an Indian Village" *Journal of Asian Studies* 16(1) pp. 5-10
- Saith, a. and A. Tankha 1972 "Agrarian Tradition and the Differentiation of a West UP village" *Economic and Political Weekly* 7 pp.707-723
- Shyam, M. & G. Krishan 1974 "Pattern of City Literacy" *Economic and Political Weekly* 9 pp.795-800
- Siddiqi, N. A. 1965 "Land Revenue Demand under the Mughals" *Indian Economic and Social History Review* 3 pp.373-380
- Sigh, Hira 1969 "Strains in Leadership Structure—from Status Group to Pluralism in an East UP Village" *Economic and Political Review* 4 pp.758-764
- Srivastava, A. L. 1969 "Religion in India in the eighteenth Century" *Journal of Indian History* 47 pp.19-26
- Whitecombe, E. 1971 *Agrarian Conditions in Northern India Vol.I The United Provinces under British Rule* University of California Press